夫婦の寝室のとられ方
私的領域形成を　どう読むか

千葉大学　特任研究員
切 原　舞 子

Ⅰ はじめに
研究の背景と目的
調査概要

Ⅱ 就寝形態と寝室のとられ方の実態

Ⅲ 就寝形態と寝室に対する夫・妻各々の意識

Ⅳ まとめ

1節　研究の背景と目的

1943年 西山夘三
1950 ：夫婦寝室の独立確保が最重要課題

1951年 吉武泰水・鈴木成文（公営住宅標準設計）
：親子の就寝の分離が主要課題

1960

食寝分離と就寝分離が住宅計画の基本課題に

1966年 W.Caudillら
1970 ：日本の特異性“夫婦関係よりも親子関係優先”

1980

親子の関係性からの提起
子供部屋に比べて夫婦寝室が未確立である

1990

2000

夫婦の関係性への着目

2001年 沢田知子：高年齢層の夫婦に別寝傾向が顕著

2003年 山崎さゆり

伝統的にわが国には儒教思想の影響による性別就寝や家父長の単独就寝、あるいは親子の添い寝の習慣などがあり、これらに起因する夫婦別寝は特殊な寝方ではなかった。

住宅供給メーカー各社で
夫婦別寝への着目
　旭化成：夫婦寝室調査
　大成建設：男と女の家　etc

夫婦別寝がメディアでも話題に
朝日新聞、 AERA、 TV番組等

夫婦別寝の分譲マンション即日完売

研究の目的

幅広い世代の家族を対象に、夫婦の就寝形態と寝室のとられ方の特徴をとらえ、家族の成長段階やその変化をふまえた、住戸計画全体における夫婦寝室の位置づけやその計画課題について明らかにする。

その上で篠田（2004年）の「日本の夫婦の意識は（中略）子ども優先で展開しており、お互いの情緒的関係を育み豊かにしていこうという方向に向いてはいない」との指摘を念頭に、夫婦本位の住戸計画について糸口を見出す。

２節　調査概要

①　調査の方法

対象地域：北海道、東北、関東、東海、北陸、近畿、中国、
四国、九州の日本の地方区分に従った9地域の主要都市

対象住戸：1990年以降に分譲された
戸建て住宅団地、
全31団地
2階建て（平家、3階建、
および2世帯住宅を除く）
住戸平面構成の主流である
総室数4室～6室の住宅が
多くを占めると想定され、
立地条件、周辺環境による
違いも排除できると考えた。

方法　　：戸別訪問によるアンケート調査票の配布郵送での回収

配布期間：2005年7月～2007年4月

収集サンプル数：710票（回収率9.2%）

有効サンプル337件

②　対象住宅の概要

・対象は全て持ち家、延床面積82.5㎡～184.8㎡、平均133.3㎡

・注文住宅64.5%、および建売住宅34.1%（不明5件）

・居室（DK以外の室で4.5畳以下の室を除く室）数は
1階2室90.0%、2階3室69.1%が多く、
1階に座敷（和室）1室とLDK、2階に3室を持つ
総室数5室の「2－3」（235件）が約6割を占める

・いずれも1階に「座敷（床の間付き和室）」あるいは「和室」を備える。

③　対象世帯の概要

ライフステージ：
夫婦とその子の就寝形態により分類したもの
家族の成長段階を示す指標として、ライフステージを用いる

夫婦のみ	：子を持たない	19	5.6
分寝前	：夫婦または夫・妻のどちらか一方と同室就寝を行う子がいる	118	35.0
分寝以降	：子がみな夫婦と別室で分離就寝をしている	153	45.4
独立別居	：子がみな独立別居中である	47	13.0
総計		337	100.0

③　対象世帯の概要

・家族構成は、子のいる世帯のほか、夫婦のみ（66件）も含む単純家族

・夫・妻の年齢は25歳から77歳までと幅広い。夫の60歳以上も15.7%存在

・夫：常勤 84.6%、 妻：無職・専業主婦 48.8%、非常勤・ﾊﾟｰﾄ・ｱﾙﾊﾞｲﾄ 31.4%

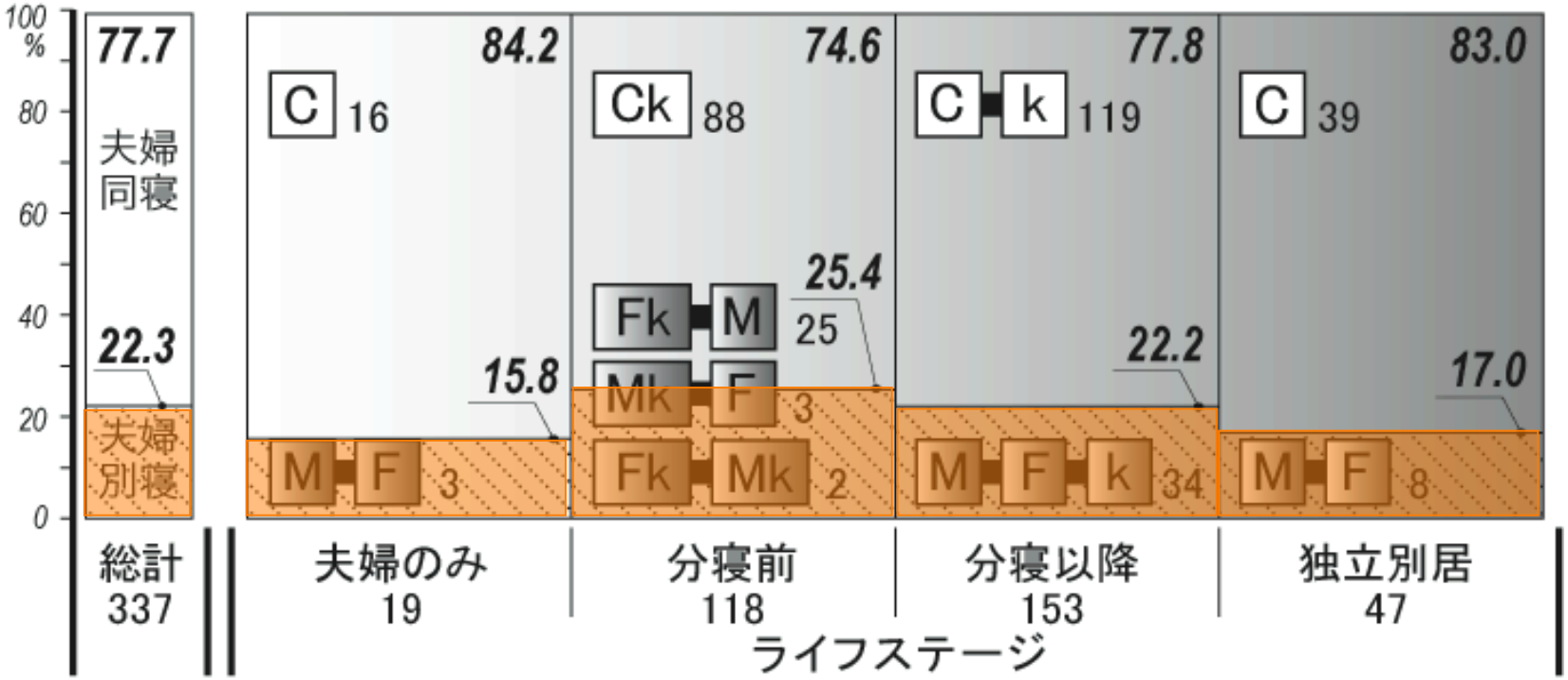
・60歳未満の「共働き」世帯と「夫のみ」就業にある世帯が中心

		同居家族人数					夫年齢（歳）					就業形態					総計
		2人	3人	4人	5人	6人	25～39	40～49	50～59	60～77	不明	夫のみ	共働き	妻のみ	無職	不明	
ライフステージ	夫婦のみ	19	－	－	－	－	7	9	3	－	－	5	12	－	1	1	19
	分寝前	－	34	57	24	3	63	53	2	－	－	68	48	－	－	2	118
	分寝以降	－	56	77	19	1	19	63	51	19	1	57	83	2	5	6	153
	独立別居	47	－	－	－	－	－	1	10	34	2	9	10	2	22	4	47
総計		66	90	134	43	4	89	126	66	53	3	139	153	4	28	13	337

Ⅱ章 就寝形態と寝室のとられ方の実態

1節　就寝形態の実態（調査時）

1）いずれのライフステージにも夫婦別寝が一定数存在



［凡例］ C：夫婦　M：夫　F：妻　k：子ども

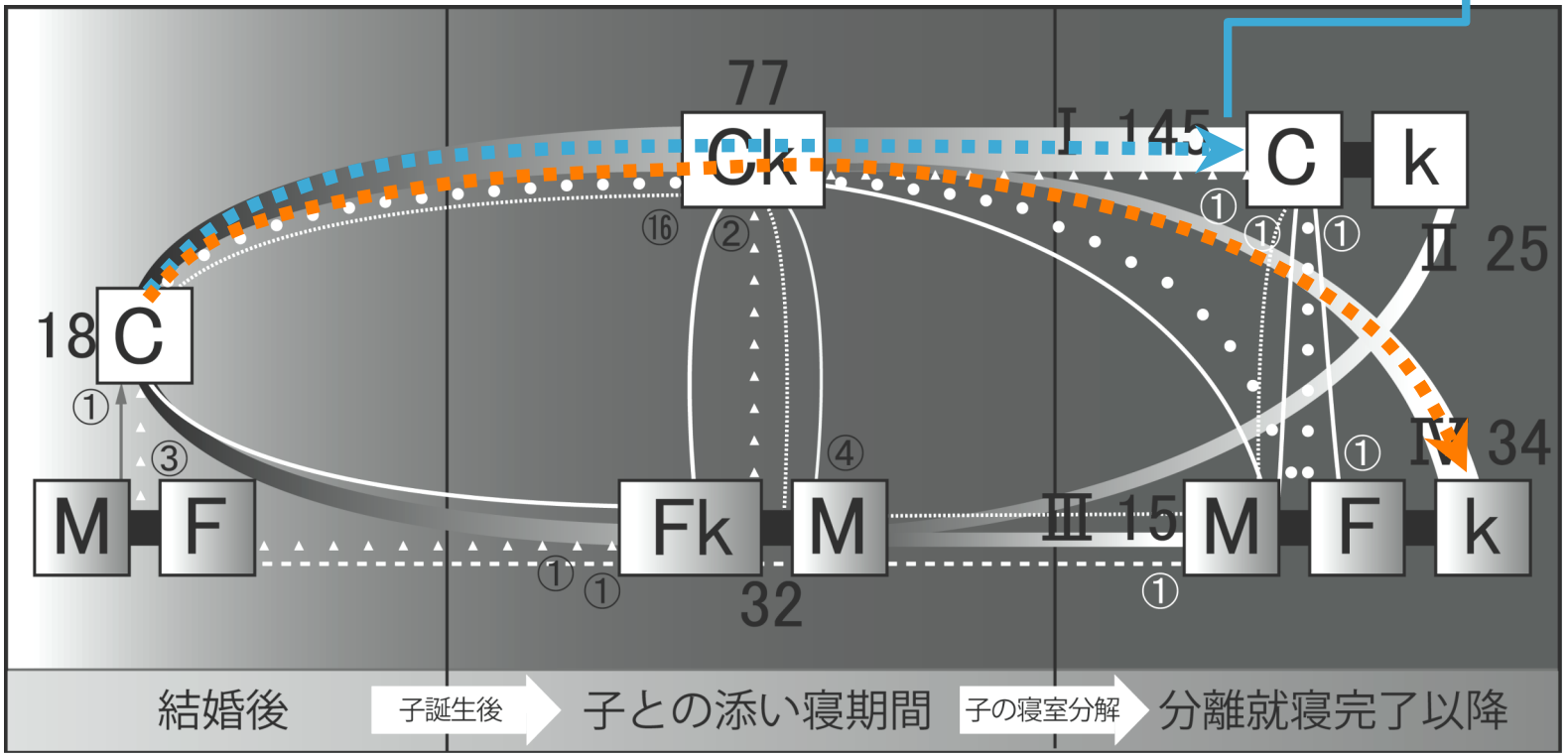
同一四角 □ 内にある記号同士は同室就寝、そのほかは別室就寝を示す

とりわけ夫婦別寝の場合には、四角をグラデーション ▨ で示す

２節　就寝形態変化のプロセス

2）夫婦別寝の契機は、子育てのみではない

夫婦が終始同寝を継続：*65.9%*



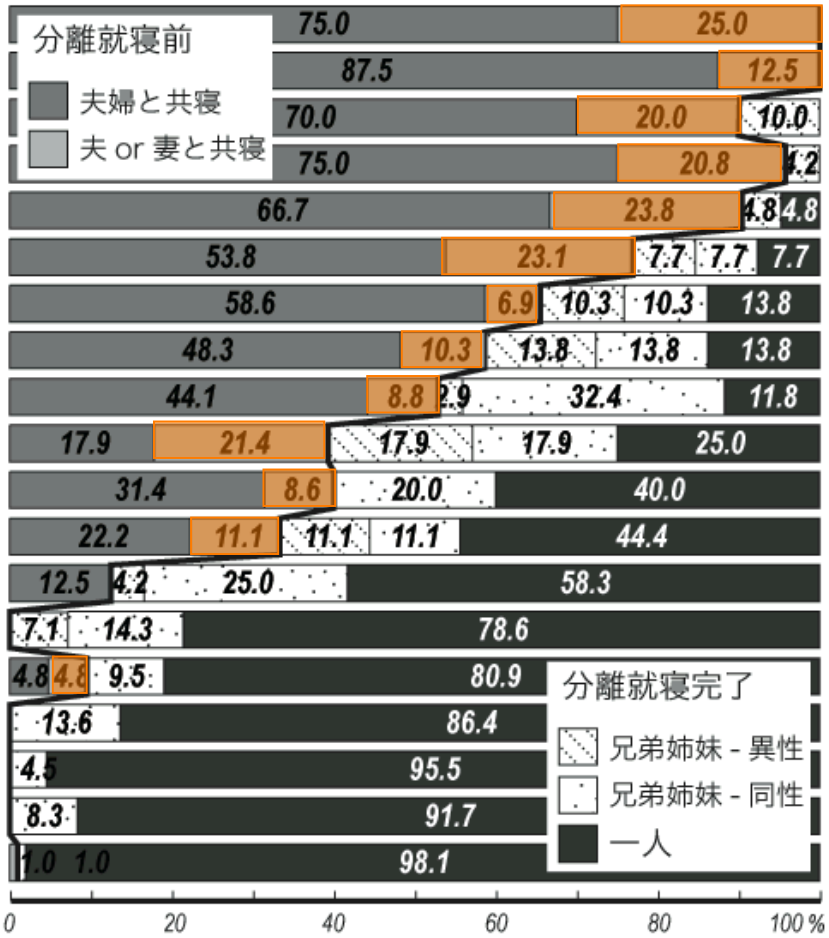
分寝前からの別寝継続は15件のみ

子の分離寝後に夫婦別寝をはじめた例：34件（*15.5%*）

３節　分離就寝時の子の年齢と夫婦と子との共寝の期間

3）いずれの年齢にも一定数存在する母子の共寝

乳児	00歳	12
	01歳	16
幼児	02歳	10
	03歳	24
	04歳	21
	05歳	26
	06歳	29
低学年児童	07歳	29
	08歳	34
	09歳	28
高学年児童	10歳	35
	11歳	27
	12歳	24
中学生	13歳	14
	14歳	21
	15歳	22
高校生以上	16歳	22
	17歳	24
	18歳以上	204



※年齢不明の子 99 例を除く（うち 90 例は分離就寝完了の例）

３節　分離就寝時の子の年齢と夫婦と子との共寝の期間

4）少なくとも子誕生後6～7年間は夫婦の就寝に子が介在

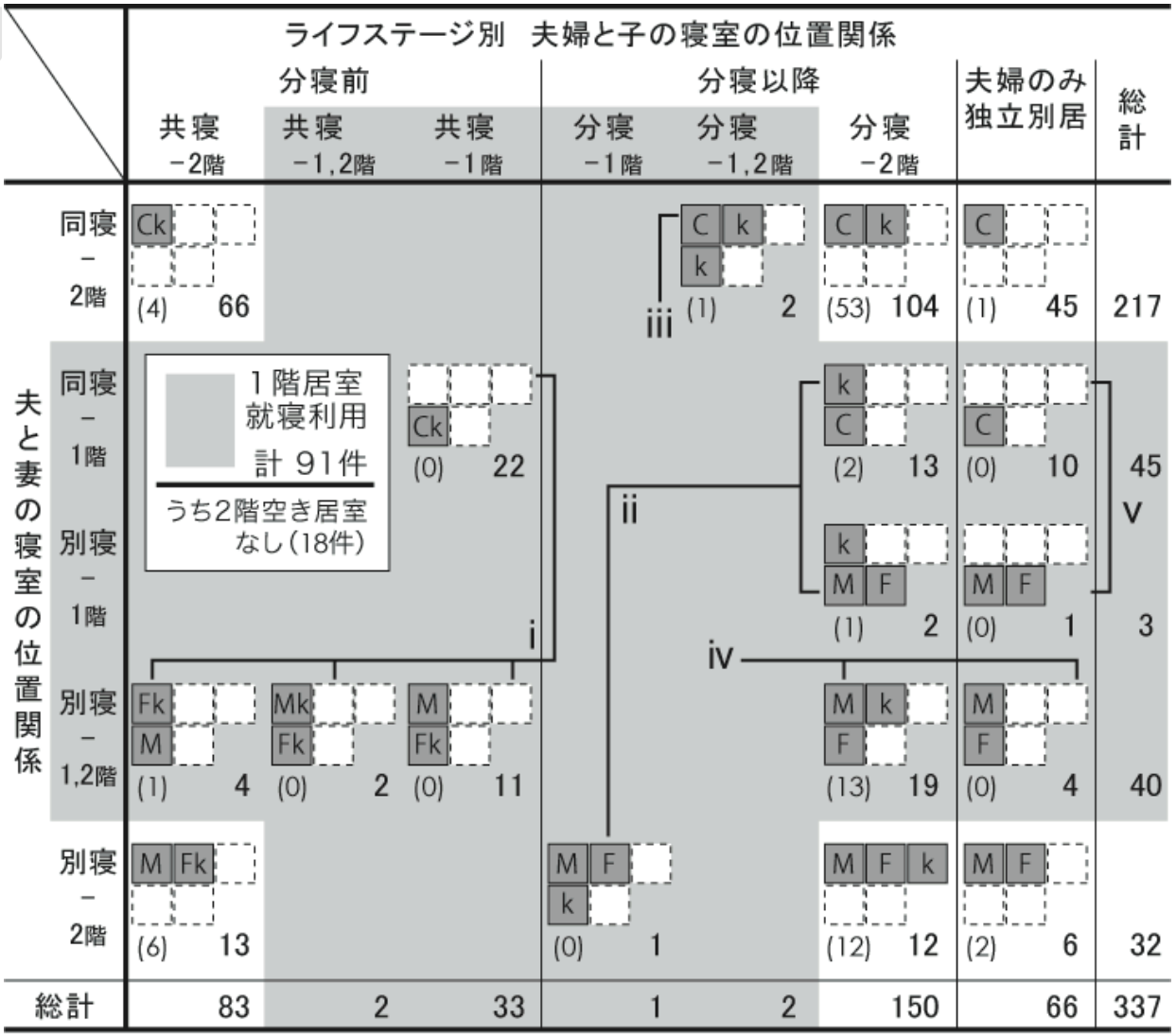
共寝：
子が親と共に同室就寝をしている例

		共寝の期間（年）																	総計	平均
		1	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	23		
子の人数	1人	1	1	5	6	5	2	6	–	2	4	–	–	1	–	–	–	–	33	7.6
	2人	–	7	8	12	6	15	15	9	3	11	6	5	5	1	1	1	–	105	9.2
	3人	–	1	2	5	2	3	6	1	5	4	3	2	5	1	1	1	1	43	10.8
	4人	–	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	3	9.0
	総計	1	9	16	23	13	21	27	10	10	19	9	8	11	2	2	2	1	184	9.3

※不明サンプル 16 件を除く

４節　寝室のとられ方

5）1階居室就寝利用 27.0%存在



※(　) 内は、２階空き居室なしの内数を示す

<u>1階就寝のタイプ</u>

- ⅰ 子との共寝
- Ⅱ 親子の1,2階分寝
- Ⅲ 長子のみ1階就寝
- Ⅳ 夫婦別寝における1階就寝
- Ⅴ 夫婦の1階居室のみ就寝

6）1階居室の就寝利用は2階居室の狭隘さが要因ではない

就寝利用する座敷（和室）が2階空き居室の面積と同等、
あるいは小さいものが60.3%（41件）を占める。

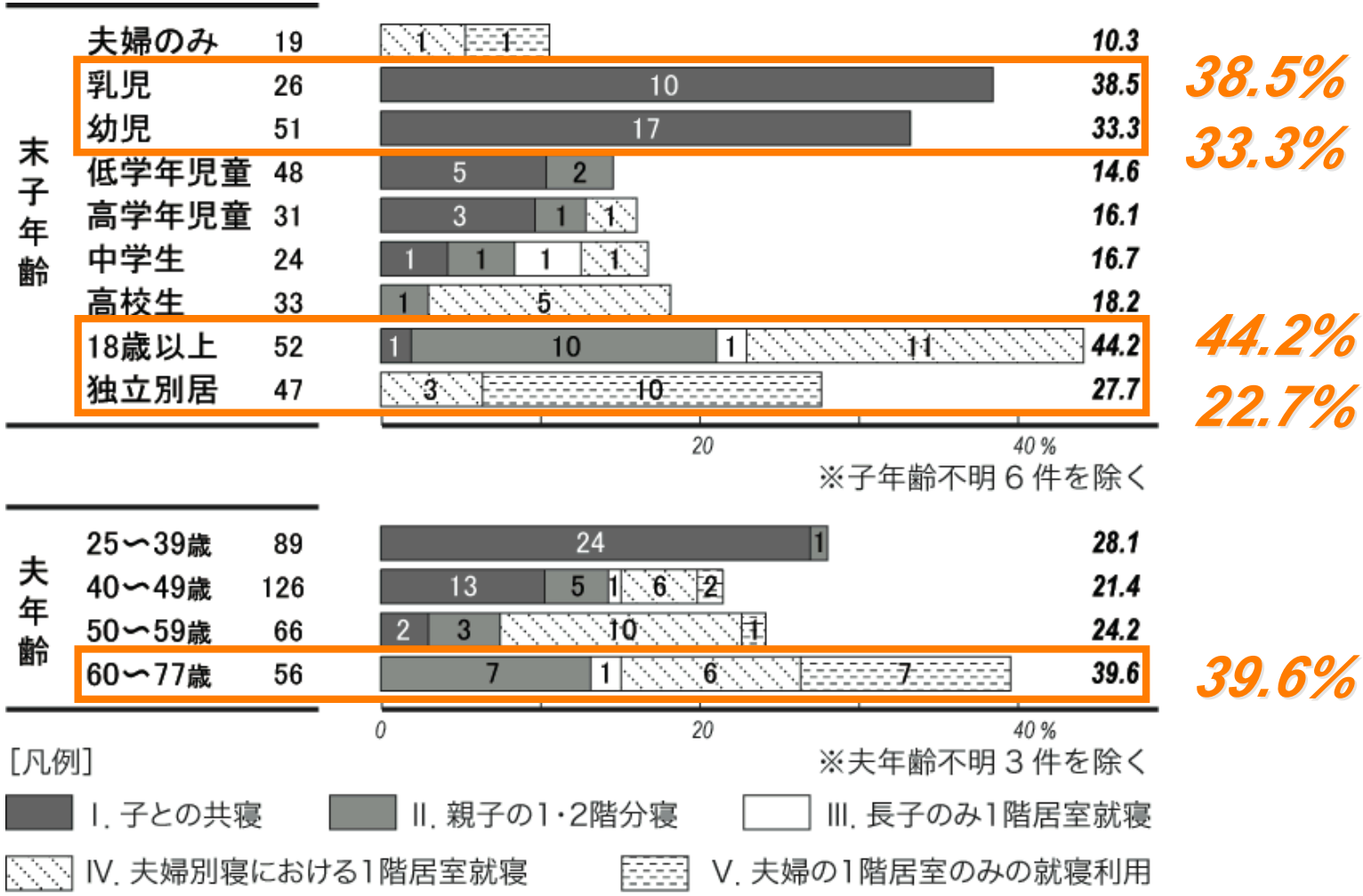
		1階座敷（和室）面積					総計	
		4以上6未満	6以上8未満	8以上10未満	10以上	不明		
2階空き居室面積	空き居室なし	1	9	7	1	–	18	
	4以上6未満	–	3	–	–	–	3	
	6以上8未満	–	9	10	–	2	21	
	8以上10未満	–	9	9	–	–	18	68
	10以上	–	10	2	2	–	14	
	不明	–	4	5	1	2	12	
総計		1	44	33	4	4	86	

計 41 件

※面積の単位は畳。太枠は２階空き居室面積と同等、あるいは小さい41件を示す。

４節　寝室のとられ方

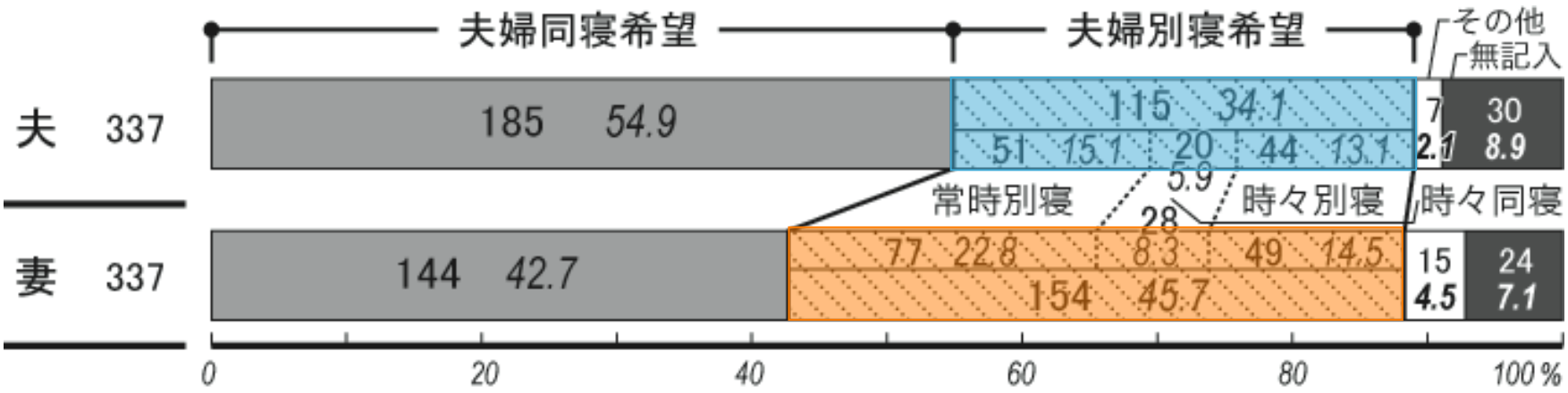
7）1階居室の就寝利用は子の乳幼児期と、夫婦の高年齢期に特に高い



Ⅲ章 ‖ 就寝形態と寝室に対する夫・妻各々の意識

1節　就寝形態の実態・希望とその特徴

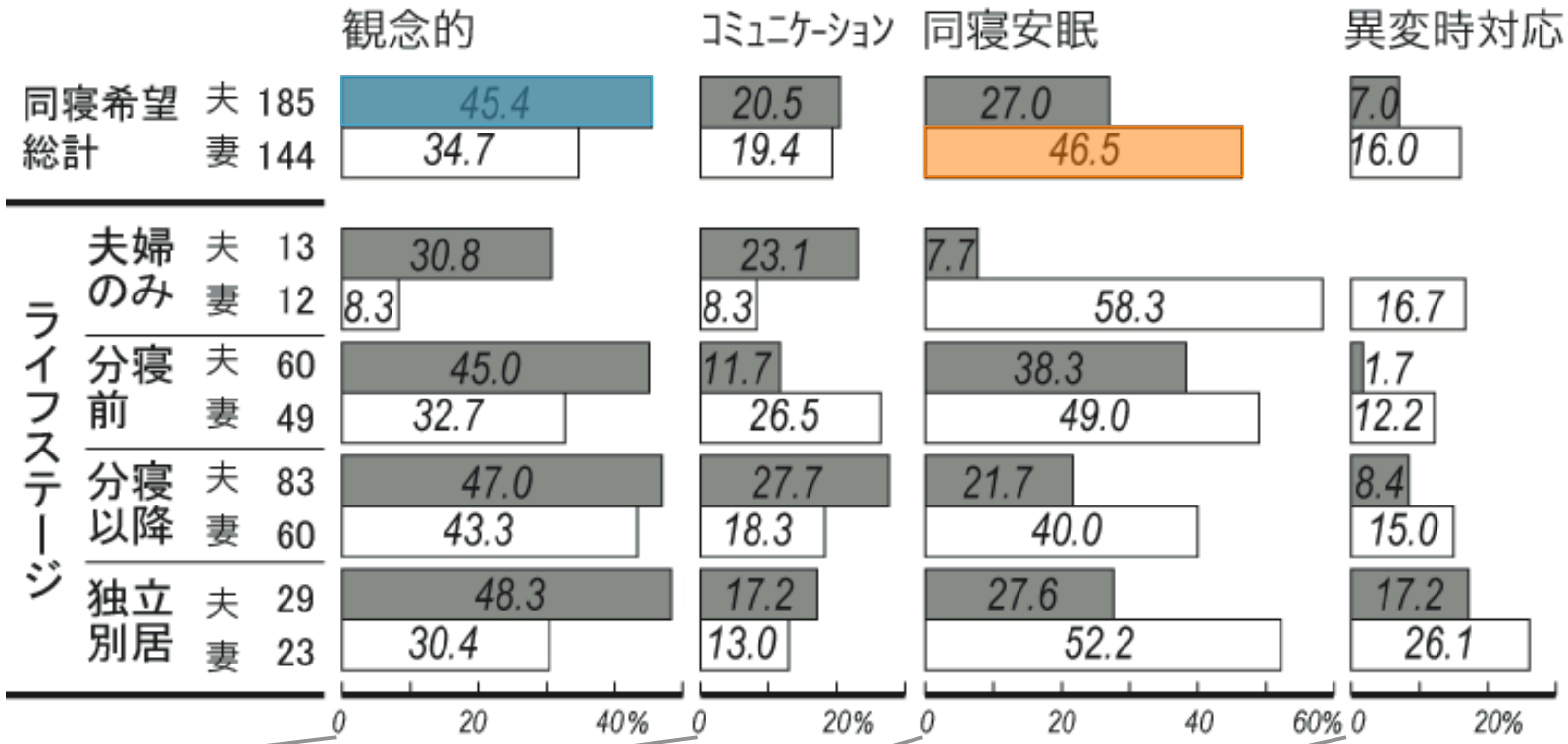
1）妻の別寝希望は同寝希望を上回る



同寝		配偶者と同じ部屋で寝たい
別寝	常時別寝	一人で寝たい
	時々同寝	普段は一人で、時々配偶者と同じ部屋で寝たい
	時々別寝	普段は配偶者と同じ部屋で、時々一人で寝たい
その他 自由回答の内容		家族全員で／普段は配偶者と、時々家族全員で寝たい 普段は家族全員で、時々配偶者と、たまに一人で寝たい 一人で寝てもいいし、一緒でも良い 家族相互の話によるもの／特に希望はない

1節　就寝形態の実態・希望とその特徴

2）同寝希望の理由、夫は観念的、妻は同寝安眠



当然/自然/結婚当初からの習慣

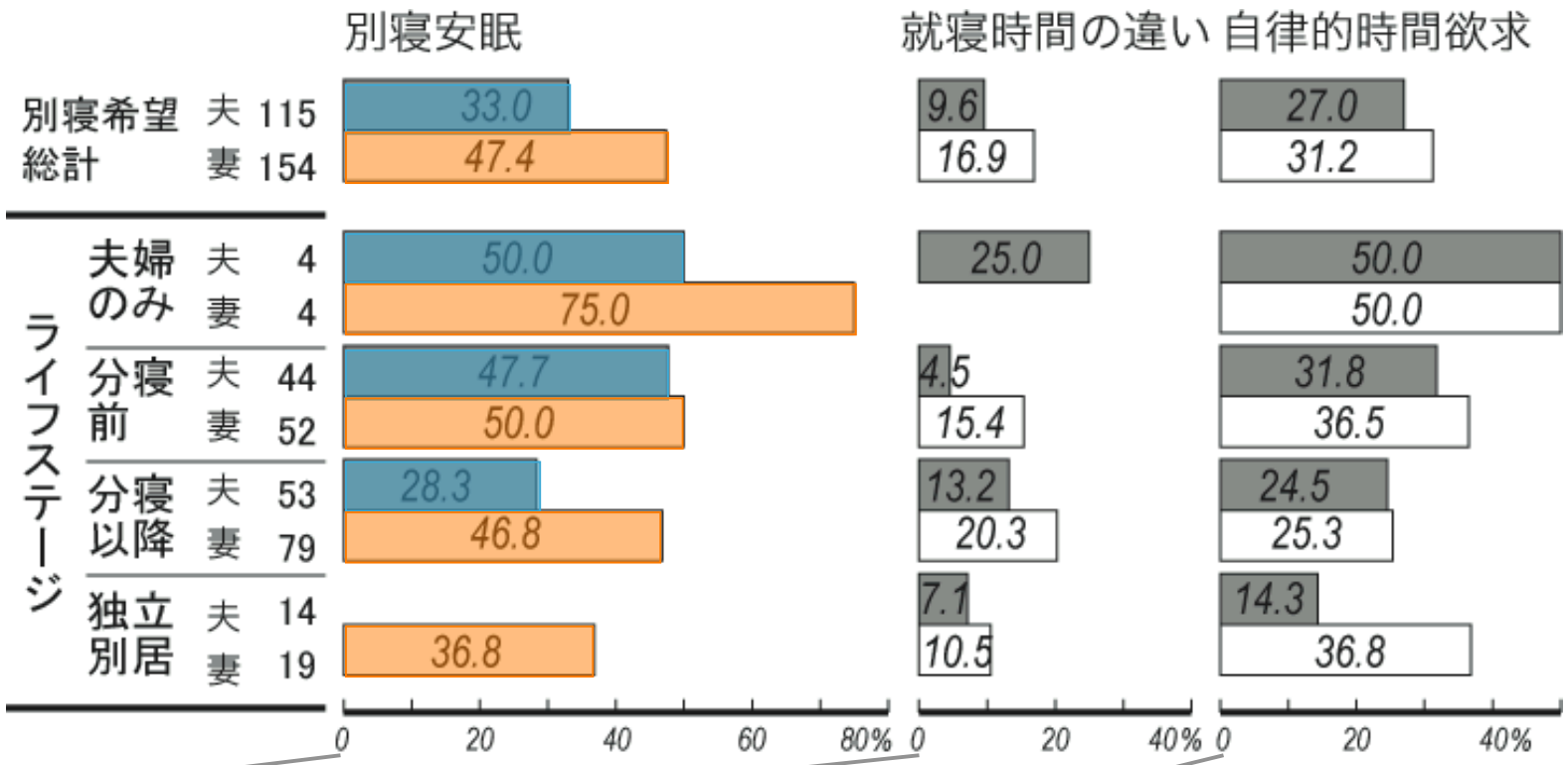
二人で寝たい/相談や愚痴を聞いてもらう

安心して眠れる/落ち着く

夜中におこる急な異変/配偶者の体調管理

1節　就寝形態の実態・希望とその特徴

3）妻の別寝希望「安眠欲求」、分寝前・分寝以降で顕著



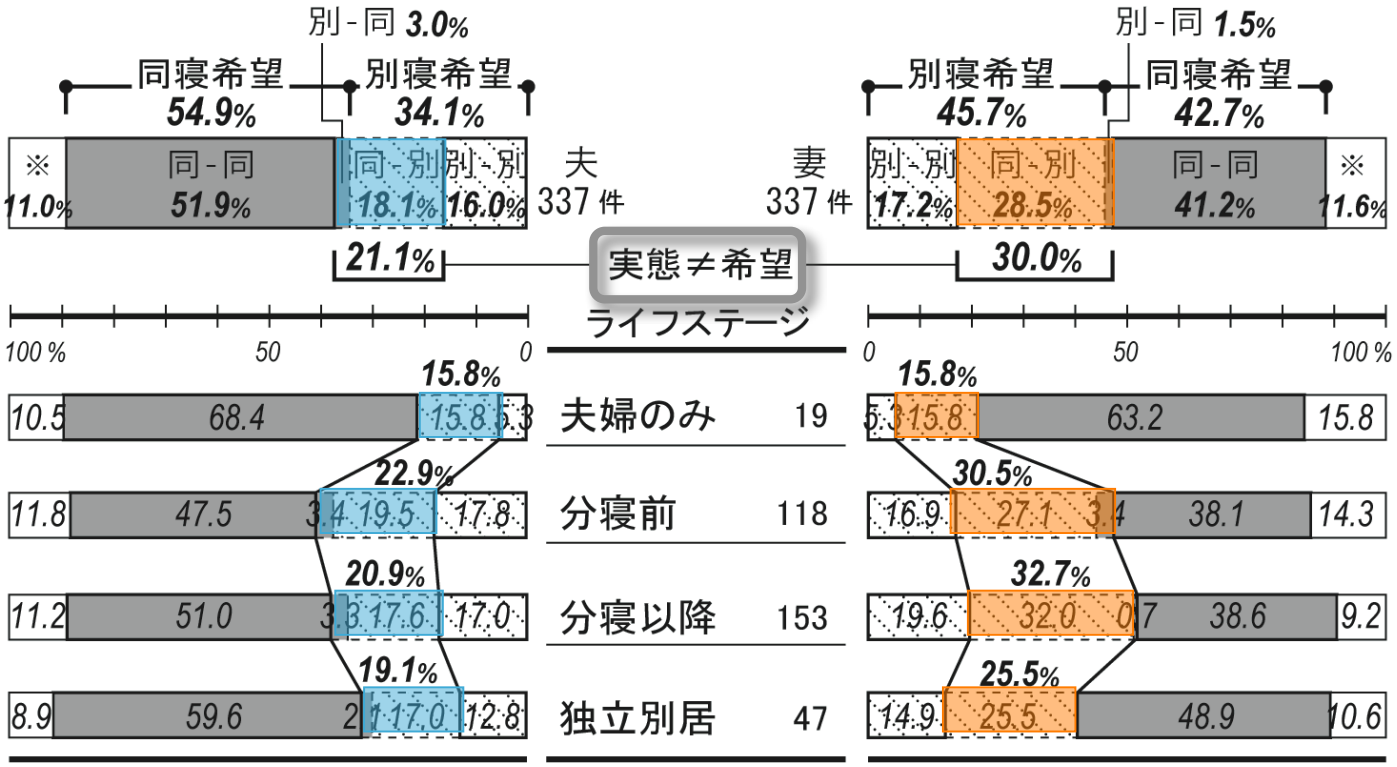
配偶者（或は自分）のイビキ・寝相が悪いため

仕事で生活時間不規則/配偶者がお酒を飲んだ日

配偶者に気兼ねなく読書・TVを楽しみたい/互いのプライバシーを尊重

1節　就寝形態の実態・希望とその特徴

4）妻に多い実態との不一致層
生理的睡眠欲求からくる別寝希望が非常に高い



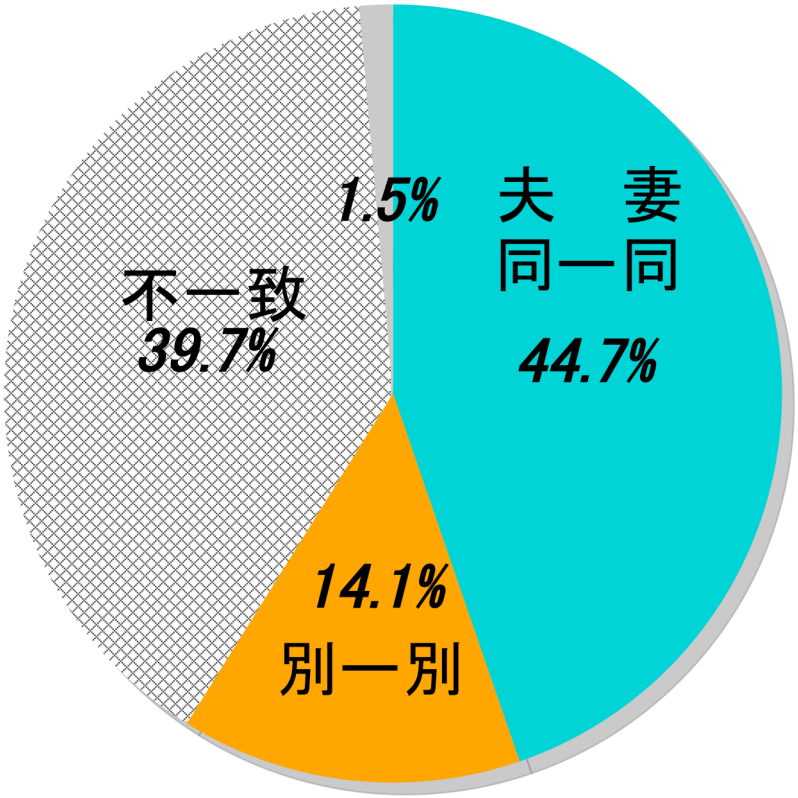
※希望就寝形態「その他」および「無記入」を示す

▶「分寝前」・「分寝以降」の妻では
実態≠希望の不一致が1/3：同寝を行う妻の4割が別寝希望

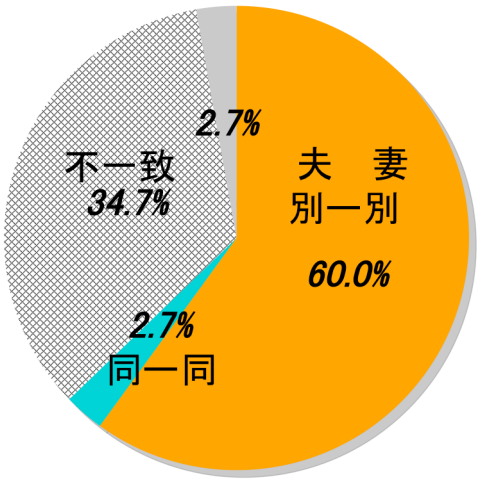
1節　就寝形態の実態・希望とその特徴

5）夫・妻ともに夫婦同寝希望・実態同寝は全体の1／3

実態：夫婦同寝　262件 77.2%



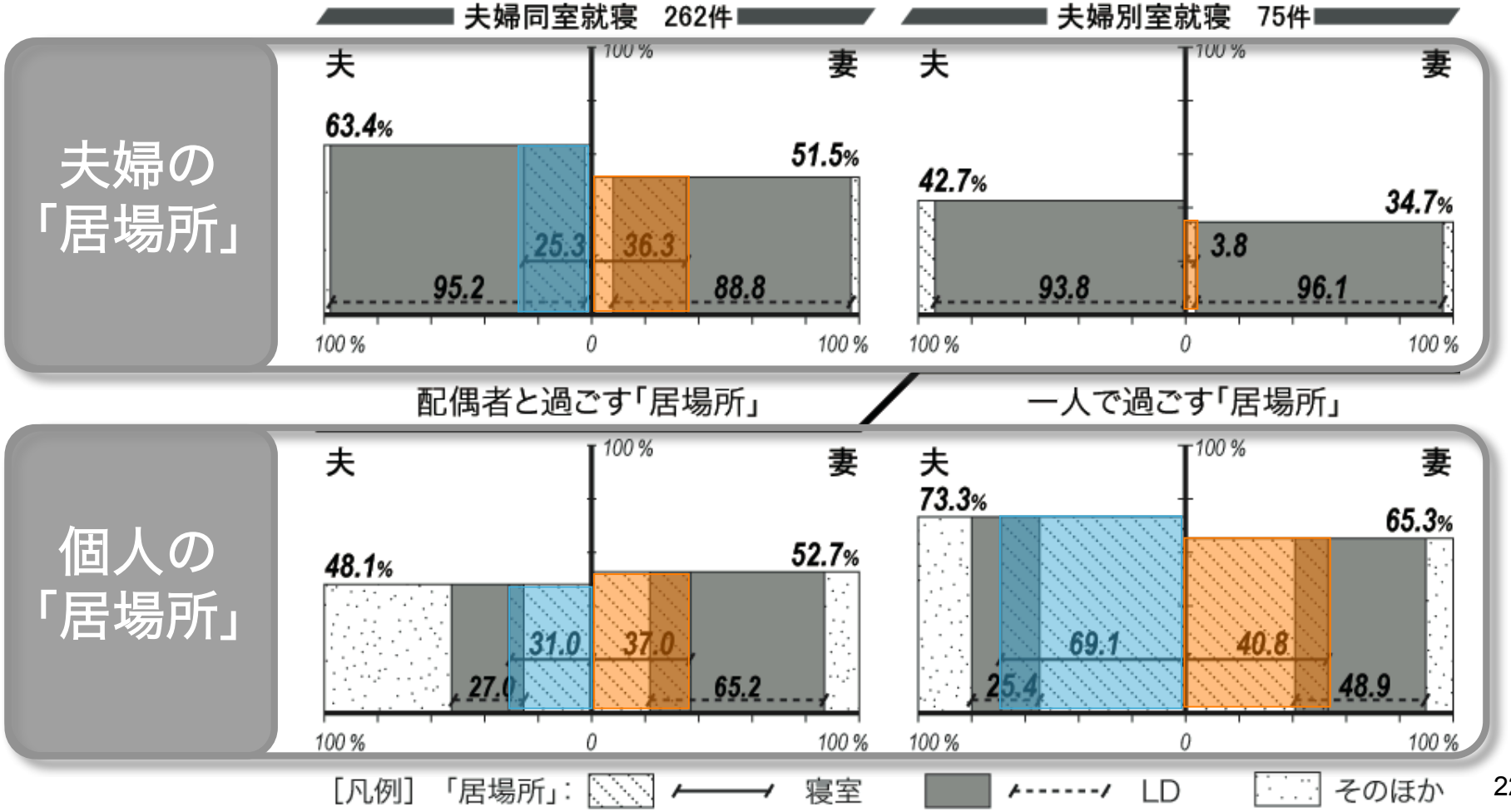
実態：夫婦別寝　75件 22.8%



▶夫･妻の希望が一致　且つ　実態が一致＝全サンプルの約4割

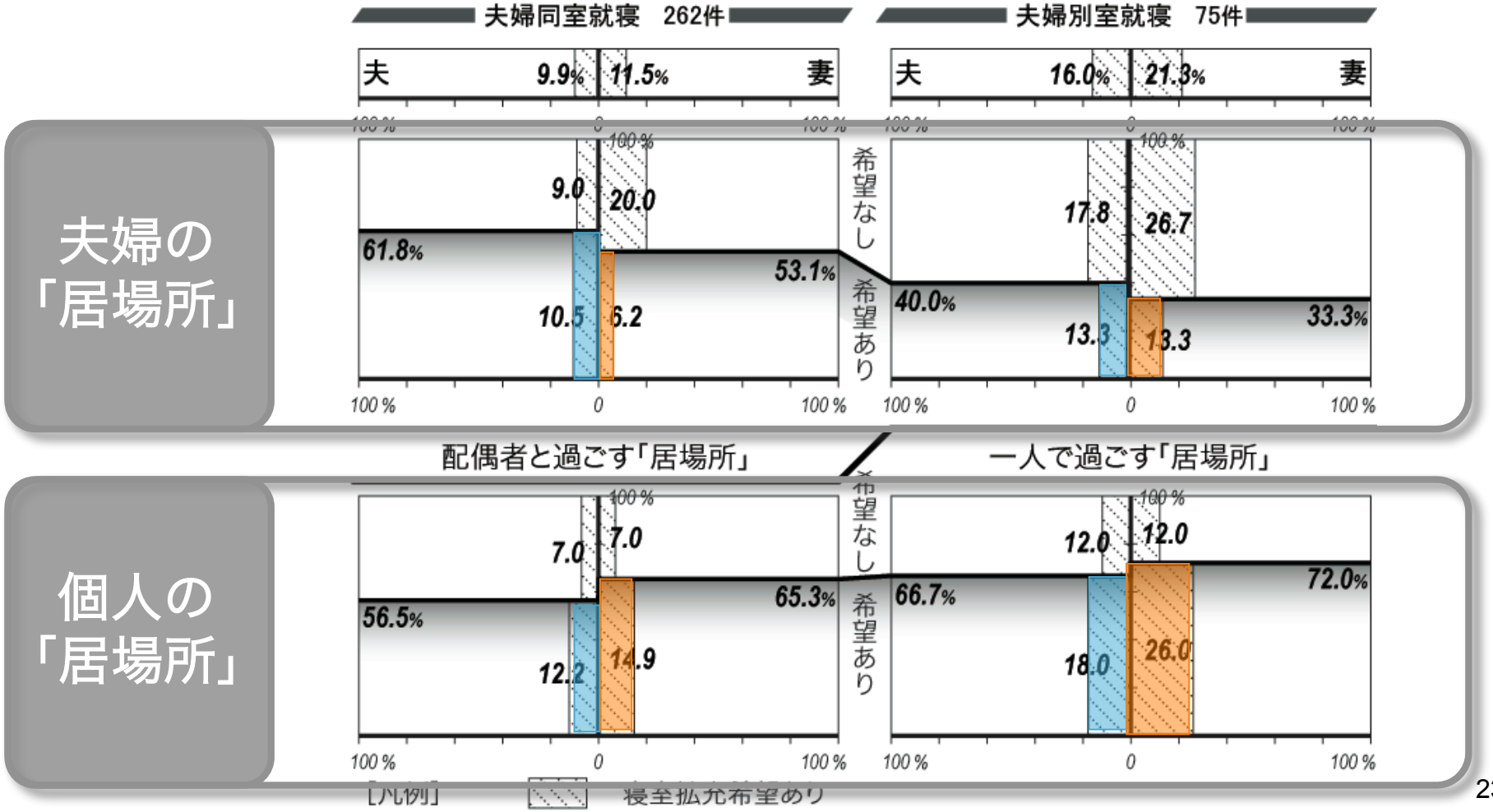
２節　現状の寝室に対する夫・妻の意識

6）夫婦の「居場所」としてはLD、個人の「居場所」としても同寝を行う寝室では低い



３節　寝室拡充への希望

7）夫婦あるいは個人で過ごす「居場所」としての寝室拡充希望は極めて低い



Ⅳ章 まとめ

３節　寝室拡充への希望

ⅰ．夫婦の寝室は、就寝形態のみでなく、寝室の位置の可変性も高い

夫婦の就寝形態の同寝から別寝、あるいはその逆の変化には、少なくとも夫・妻のいずれか一方が寝室移動を伴うわけであり、夫・妻の両方とも寝室移動を伴う例や、就寝形態は変化しなくても寝室移動を行う例も考え合わせると、その可変性の高さが指摘できる。

ⅱ．夫婦の「居場所」としては、LDに強い傾向

青木（1985年）は「今後、夫–妻の結びつきが、家族の中の中心的な結びつきとなるならば、（中略）その空間は単なる寝室ではなく、『夫婦の居室としての居間』として要求」されるようになるであろうと観測しているが、少なくとも現状ではそのような発想が普及・定着しているとはいいがたい。

Ⅲ. 複合性の高いLD

夫婦の「居場所」としてはLDにその強い傾向が認められる点と、来客の応対のほとんどがLDで行われている点を考え合わせると、家族のだんらん空間は接客領域でもあり夫婦の「居場所」でもあるという、LDの性格は依然として複合性が高いことも指摘できる。

Ⅳ. 可変性の高い家族の就寝形態を許容する1階の座敷・和室

1階の座敷・和室の存在が夫婦別寝への高い希望に対応している点も認められた。畳敷きであることの有用性については、布団かベッドかの寝床様式も考慮せねばならないが、可変性の高い家族の就寝形態を許容という観点からの評価もできるのではないだろうか